

# 潟語り (二)

文・小西 一三  
絵・小西 由紀子

## 「干拓前の漁のこと」

今は四方を美しい水田に囲まれている「塩口地区」ですが、干拓前は潟に面しており、漁業が盛んだった所です。ほとんどの家は自宅近くに船着き場を持ち、潟での漁が暮らしを支えていました。しかし、干拓と埋め立てにより船着き場は消え去り、かつての面影はまったく残っていません。現在は残存湖に通じる水路に地区の船着き場が設けられ、その両側には漁船が整然と浮んでいます。

多くの漁師のいた塩口地区ですが、今なお漁業を専業としている人は、三、四人。その中の一人、桜庭為治さん（昭和四年生まれ）に、昔の漁について話をうかがいました。

### 漁場まで船をこぎ続けて四、五時間の時も…

もちろん親父も漁師。小さい時から親父と一緒に船に乗ってたけど、高等小学校を出てからは毎日のように漁に出たな。家の前から現在の堤防の付近まで、「ケナ」と呼ばれる竹の冊を建ててな。その先に網を仕掛けると、ケナに沿って



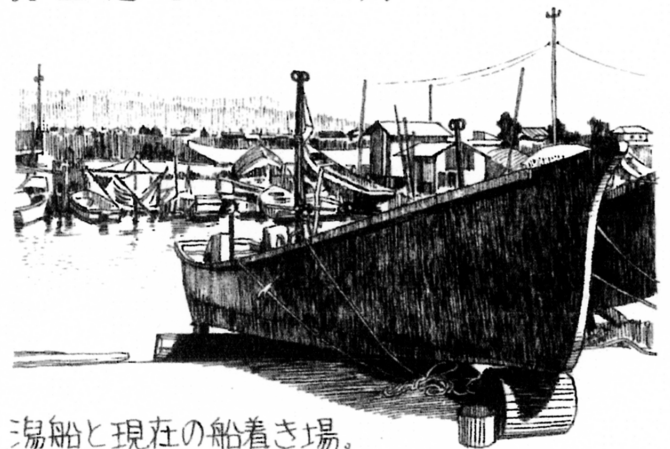
修理のためひきあげられた潟船。たいらな船底が特徴。

ける、ケナに沿って

泳いで来た魚がそっくり入る。ボラ、シロメ、ウナギ、カレイ、なんでも入ったな。大変だったのは遠くまで行く時。親父と二人で船をこいでも、今の大潟村付近まで、風の無い時で四、五時間。いい風のある時は帆を上げて走ったから楽だったけどな。

しばらくして焼玉エンジンを使うようになったけども、今のエンジンと比べれば、オモチャのようなものだったな。シンリンダーは一つで、二馬力程度。そんなエンジンで木造の重い船を動かすんだもの。向かい風が吹けば、船は進まね。それでも条件のいい時は大潟村まで一時間半位で行ったな。当時はすごい機械だと思ったけども、今の船外機だと、同じ距離でも二十分で行ってしまう。

網入れの場所は、男鹿の寒風山、真山を目印にして決めたな。寒風山と真山が重なって見えれば「一枚」。逆に見えるようになる。「二枚」というようにな。だから親父と網の場所を話す時は、「何枚目の場所のどこそこ」という話ですぐわかる。それにしても昔の潟は広がった。魚はたくさんいたけども、広いだけ、網入れが難しかったな。



潟船と現在の船着き場。